

ブラジルにおける韓国系エスニックコミュニティにおける言語接触とコンフリクト

朴 秀娟

1. はじめに

本調査研究は、大阪大学 COE プログラム「インターフェイスの人文国際研究」及び、本グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究拠点」の一環として実施されてきた、ブラジルにおける日系・沖縄系移民の言語の接触と混合をめぐる調査研究をさらに発展させ、ブラジルにおける韓国系移民の言語と接触、さらには他の移民集団やブラジル人との間に発生しているコンフリクトの問題を考察することを目的としている。本調査研究は、サンパウロ大学の森幸一教授との共同調査研究であり、筆者は主に、現在盛んに行われている言語接触論の観点から、ブラジルの韓国系エスニックコミュニティにおける言語接触の実態について担当する。

ブラジルにおける韓国系移民に関する研究はそれほど蓄積されておらず、とくに、韓国系移民の言語接触を扱った研究は、韓国国内・国外を問わず皆無に等しい状況である。ブラジルの日系・沖縄系移民の場合、工藤他（2009）、白岩他（2011）など、談話の実態についての考察のみならず、言語使用意識や言語能力意識などについても報告が進んでいるとは対照的である。

韓国からのブラジルへの移民は、公的には、1963 年の農業移民から始まったとされている。しかし、その後、サンパウロ市内へと移住、現在、韓国系移民が集中している地区である Bom Retiro 地区へと定着するようになる。Bom Retiro 地区は、最初、Braz、Mooca 地区の工場へ賃金労働者として移動してきたイタリア系の移民と若干のブラジル人が居住していた地区であり、韓国系移民が定着する前は、ユダヤ系移民が集団で移住し、縫製業による製造・販売を特徴とするユダヤ街区へと変貌していた地区であった。しかし、韓国系移民の移住により、その主役は韓国系移民が担うようになり、現在は、「コリアタウン」として呼ばれている。このように、Bom Retiro 地区が「コリアタウン」となるまで、韓国系移民は、様々なエスニックグループとの接触を経ているのである。

本調査研究で、筆者は主に、従来、あまり考察されることの少なかった、ブラジルにおける韓国系移民に注目し、他のエスニックグループとの接触の結果として、言語接触の実態はどのようなものであるか、言語生活はどのように変化しつつあるのかを考察していく。

2. 今回の調査の位置づけ

言語接触とは人と人の接触でもあることから、言語生活の実態をより正確に把握するた

めには、それぞれが属するコミュニティの社会的、経済的、政治的などの背景についても考慮する必要がある。しかしながら、第 1 節でも述べたように、ブラジルの韓国系移民に関する研究の多くは移民史に関するものであり、韓国系移民に関する諸情報を文献から収集することはむずかしい。そのため、今回の調査は、2012 年度に実施予定の本格的な調査の予備的調査として位置づけ、ブラジルの韓国系移民社会の特徴についての把握を中心に、本調査研究の基盤となる諸情報を収集することを目的とした。調査期間は、2011 年 3 月 9 日から 3 月 22 日までの約 2 週間である。

以下、今回の調査で得られた結果に基づき、ブラジルの韓国系移民社会の特徴についてまとめる。

3. ブラジルの韓国系移民社会の特徴¹

本節では、ブラジルにおける韓国系移民社会の特徴について、人口 (3.1)、地理的分布 (3.2)、職業 (3.3)、韓国系社会の構造 (3.4)、言語運用 (3.5)、韓国系移民のアイデンティティ (3.6) に分けて述べることにする。

3.1 人口

ブラジルは、中南米において韓国系移民が最も多い国である。韓国の外交通商部の 2009 年度の「在外同胞現況」に関する報告によれば、中南米に在住の韓国人は 107,029 名であり、そのうち、過半数近くの 48,419 名がブラジルに在住している。しかし、実際には、ブラジル韓人会などの現地の機関が推定している数とはずれが見られ、総合すると、駐在員を除き、だいたい 3 万 5000 人から 6 万人であると推定される。

移民者の出身地は、朝鮮戦争時に南下した北朝鮮出身や慶尚道出身の人々が多く、最近ではソウルからの移民も見られる。

3.2 地理的分布

ブラジルにおける韓国系移民の約 9 割以上はサンパウロ市に居住している。サンパウロ市で韓国系移民が多く見られる地域は、次に挙げる三つの地区である。

① Bom Retiro 地区

主に、商圏が集中している地区である。生活に必要な施設や設備が整っており便利で

¹ 本節の内容は、調査期間中に訪問先で収集した資料及びインタビューに基づいたものである。主な訪問先は以下の通りである。なお、ブラジル現地の機関での情報収集は、森幸一教授と共同に行った。

・駐サンパウロ大韓民国総領事館/IBGE (ブラジル地理統計院) /ブラジル韓人会/南米東亜日報社 /サンパウロ大学図書館/駐サンパウロ韓国教育院/主要な教会・寺院/大韓婦人会/韓伯教育協会・ブラジル韓国学校/新聞社 (O Estado de Sao Paulo 社) /ハングル学校/ポルトガル語学校
・Ahn, Kyung Ja 先生 (ブラジル韓国学校元校長/移民 50 年史編纂執筆委員) /Im, Yun Jung 先生 (サンパウロ大学・韓国語講師) /ブラジル韓人会の会長/Bom Retiro 病院の家族 (1 世~3 世までがいらっしゃるご家族)

あるため、居住地としても使われている。2010年に、ブラジル政府により「コリアタウン」として制定された。

② Aclimacao 地区

韓国系移民の居住地域である。ブラジル韓人会、大韓婦人会・老人会の本部が位置している。

③ Higienópolis 地区

韓国系移民の居住地域である。ユダヤ系移民が多く居住しており、治安がよい。

それぞれの地区には生活水準が反映されており、生活水準がよくなるにつれて、Bom Retiro 地区から Aclimacao 地区へと移住、そして、さらによくなると Higienópolis 地区へと移住する傾向がある²。

3.3 職業

韓国系移民の7割から9割は縫製業に携わっている。移民社会では縫製業のことを「製品」と呼んでおり、Bom Retiro 地区の José Paulino ストリートは、サンパウロ市内でも、いわゆる「製品」で有名なストリートとして知られている。その他の1割から3割は、飲食業やサービス業に携わっている。

3.4 韓国系社会の構造

ブラジルの韓国系社会の構造に見られる大きな特徴は、教会を中心とするコミュニティ構造であることである。サンパウロ市内だけでも50を超える教会が存在する。移民の約5割が教会に行っているとも言われている。韓国系の教会では、次に示す教会が代表的な教会として挙げられる。

①. プロテスタント

- ・ 東洋宣教教会 (Bom Retiro 地区)
- ・ 聯合教会 (Liberdade・Aclimacao 地区)
- ・ Sae-somang 教会 (Bras 地区)

② カトリック

- ・ Daegeon 聖堂 (Bom Retiro 地区)

また、韓国系社会では、教会以外にも、体育会、ゴルフ協会、サッカー協会、テニス協会、バドミントン協会など、スポーツ協会が占める部分も多い。スポーツ同好会が数多く

² 韓国系移民がブラジルへと移民し Bom Retiro 地区に定着する前は、日系移民が集まる Liberdade 地区とそれほど離れていない Conde de Sarzedas に「韓人村」を形成していたとされている。「Conde de Sarzedas→Bom Retiro→Aclimacao→Higienópolis」という移住経路は、ユダヤ系移民の移住の経路と同じであり、興味深い。

存在し、所属しているクラブによってその人の経済水準や志向が分かるという「階級化」現象が見られる。

一方、出身地域、渡航年度、業種別による集まりはほとんど見られず、むしろこれらを結成することに抵抗感を持っている人も多い。

3.5 言語運用

本節では、調査時の観察を基に、韓国系移民の言語運用について述べる。この点については、より細かい場面及び状況を設定し、詳しい条件のもと分析を行うべきであるが、ここでは現段階で観察できたものをひとまず簡単に述べておく。

まず、世代別には、1世から2世、3世へと、世代が下がるほど、韓国語の運用能力が落ちてくるが、2世の中には、韓国語においても、ポルトガル語と同様なレベルで駆使できる人たちがいることが観察できた。

次に、場面別に見ると、家族や友人とはポルトガル語と韓国語を用い、経営するお店の従業員とはポルトガル語を用いる傾向にあるようである。

言語運用及び能力に関与していると思われる要因としてはいろいろ考えられるが、ブラジルの韓国系移民においては、主に、次に挙げるものが影響していることが考えられる。

- ・ 家族構成（祖父母と同居しているかどうか）
- ・ 兄弟の世代（1.5世の兄弟がいるかどうか³）
- ・ ブラジルに移民する前に滞在していた国
- ・ 移民の最終目的地（アメリカ／ブラジル）
- ・ 渡航時期
- ・ 学校教育（韓国学校／ブラジル人学校）
- ・ 職業（縫製業／その他）
- ・ 家庭内教育（親の「韓国人」としての意識）
- ・ 韓国系企業への就職を希望するかどうか

3.6 韓国系移民のアイデンティティ

韓国系移民のアイデンティティは世代によって次のような違い見られるようである。

まず、1世や1.5世は、韓国人としてのアイデンティティについて強調しながらも、ブラジル社会に同化する必要があることについても強調する人が多く見られる。

次に、2世は、ブラジル社会への同化を強調する人が多い。

これは、居住地域（韓国系地域に居住しているかどうか）にも反映され、また、居住地域が意識に影響することもあるようである。

³ ここでいう「1.5世」とは、言語形成期を越え、1世とともに移民してきた世代を指す。

5. おわりに

ブラジルにおける韓国系移民に関する諸情報を得るための予備的調査として位置づけられる今回の調査では、主に、次を実施することができた。

- ・ブラジルにおける韓国系移民に関する統計資料および文献の収集
- ・韓国系移民の歴史的背景の把握
- ・韓国系社会の構造に関する概略
- ・韓国系移民の言語運用や意識の実態に関する観察

今後は、これらより得られた情報を基に、韓国系移民の言語接触の実態に影響を与えていると思われるファクターを選別し、言語生活調査票を作成、本格的な調査を行なう。さらに、本調査研究をはじめきっかけとなった、日系社会の言語接触に見られる諸特徴との比較を行い、それぞれの移民社会の言語接触に見られる共通的な特徴、独自に持つ特徴について分析をしていく。

【引用文献】

外交通商部（韓国）（2009）「在外同胞現況」（<http://www.mofat.go.kr>）

工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵（2009）『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房

白岩広行・森田耕平・齊藤美穂・朴秀娟・森幸一・工藤真由美（2011）「ブラジルとポリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語」『阪大日本語研究』23、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座